

を樹てることは不可能なる。全協指導部が、初茶苦茶な方針を發表するやうになつたのも、無論、第一には、組織の散離から来てゐる。(三) 上述の如き、白色テロルの鋭く重き殘業と、左翼組合連竹指導部が、この奥の底下の当然の結果として、左翼労働組合戦線に左の如き悲しむべき結果が生れた。

二、旧評議会加盟の組合中大部分の分散孤立化

三、全協の台法性獲得運動の徹底失敗

(六) 旧評議会加盟組合の多くが孤立分散化して行つたのは、明かに、うろたく白色テロルの猛襲に對する斗争力の不足と、全協指導部の誤つた指導方針との結果である。旧評議会加盟組合中の、比較的豊富な経験を拵つた指導者は、何とかがして、全協指導部の誤つた指導方針を改め、旧評議会の再建を完成しなげればならぬ。しかし考へつても、事實上、それは完成するだけの實力を拵ち得ず、只儘かに、全協指導部の指導から離れて、各自の所屬する組合の組織と活動とを擁護し得たに過ぎなかつた。しかも、それに対し、全協指導部は、いたづらに、裏切者呼ばりをすだけけ、何等の自己批判を行はず、寧ろ益々組織の分散化を早めて行つた。

(六) 第二の、旧評議会加盟の組合中で右翼中間派へ移行して行つたもの

の、生じたのは、多くは、その組合の有力な指導者が大部分奪ひ去られ、了ひ、しかも資本の攻勢が益々激化し、組合大衆の生活が急激に脅かされるに至つた結果、一般組合員大衆が莫論たる不安のうちに、中間派、もしくは右翼、へでも行つたら何とかなるだらうと考へるやうになつたことの結果である。

(六) 第三の、全協の台法性獲得運動の失敗も、無論、第一には、最近に於ける帝國主義政府のフアンズム政策の結果であるが、一つには、全協の指導者が組合の台法性獲得の方針を放棄し、革命の前夜に、台法協組合でやつて行かうとするやうなことは徹底して見なされ、その結果である。甚しきに至つては、台法性を拵つた組合が、自ら非台法場面へ移行することを宣言して、組合の台法性を放棄して行つた、と何やらやうな裏切向をさへ生じた。

(六) 以上の如き表状状態が、今日まで我が左翼組合戦線を支配して来た。そしてその結果生じたのは、左翼組合の幾度の斗争力の衰退である。獨立分散化した多くの組合が、今日まで、如何に苦難な斗争を続けられるを得なかつたか。又、右翼、中間派へ移行して行つた組合がその後、如何に奮起したか。又、下つたことか。 (それらの組合に對しては、概して斗争を断絶することとは、今では全く不可能だ。) 更にまた全協指導部